教会とは何か？ 今改めて考える¹⁾

須 田 拓

はじめに

教会は神によって集められた群れである。しかし、2020年3月以降の新型コロナウイルスの感染拡大は、教会の根本にある「集まる」こと自体に大きな影響を与えた。もちろん、そのコロナ禍にあってこそ気付かされた教会の課題や、新たな伝道・牧会の可能性もあるであろう。

ようやくその影響を脱しつつあり、まさに教会が再出発を迎えようとしているこの時、もう一度、そもそも教会とは何か、そして教会は神学的に、とりわけ教義学的に、どのように位置づけられるのかを考えてみたい。

1. 教会の本質

まず、教会についての基本的な事項を整理しておこう。教会はエクレーシアであり、即ち「呼び集められた者の群れ」である。その群れは同時に、洗礼によってキリストに結ばれた者の群れである故に「キリストの体」であり「神の民」でもある。

しかし、教会は信ずるものでもある（「教会を信ず」）。そのために、「教会のしるし」が重要であることになる。アウグスブルク信仰告白は、第7条で「教会は、福音が純粋に教えられ、 sacrament が正しく執行される聖徒たちの集

まりである。教会の真の一致のためには、福音の教えと sacrament の執行における一致だけで十分である」と告白する。ここから、福音の純粋な説教と聖礼典の正しい執行の二つが、教会のしるしと呼ばれるようになった。これに改革派はしばしば「戒規（信徒訓練）」を教会のしるしに加えるが、概してこの二つこそが、そこが確かに教会、すなわちエクレーシアでありキリストの体であると信ずる根拠となる。教会において人は、洗礼によってキリストに結ばれ、神の子、神の民とされ、聖餐によって神の民の祝宴、即ち神の国の祝宴の先取りが起る。そして御言葉に基づいた福音の説教によって正しい教えが語られるならば、そこにキリストがおられること、そして既に私がキリストに結ばれ、主の十字架による赦しを受け、神の子、神のものとしてされていることが明らかにされる。

その教会は、「一つの、聖なる、公同の、使徒的教会」（ニカイア信条）と告白される。

教会はキリストの体であるが、そのキリストはお一人である故に、教会は一つである。そして、教会はキリストに結ばれた者の群れであり、神の民、神のものとされた者の群れである故に、聖なるもの、即ち世から区別されたものでもある。

教会の公同性と使徒性をどのように理解するのかは議論がある。公同とは、ギリシャ語の *kata holos* つまり全体を表す言葉に語源を持つ。既にアンティオキアのイグナティウスが「キリストのおられるところ、そこに公同の教会がある」と語り、そしてエルサレムのキュリロスは、この公同性を次のように説明した。

このように、教会は「公同」と言われる。人の住んでいる全世界に端から端まで広がっているからである。それはまた、天にあるものにしても、地上にあるものにしても、可視的なものと不可視的なものについて人が知らなければならぬあらゆる教理を、余すところなくその全体性において教えるからでもある。「公同」と教会が言われるさらなる理由は、支配者

であろうと、その臣下であろうと、また教育を受けた人々であろうと、そうでない人々であろうと、あらゆる人々を従わせるからである。教会はまた、あらゆる種類の罪への普遍的な手当てと癒しとを与える。²⁾

即ち、教会が全世界に広がり、そこに全てのものがあることとした。やがてローマ・カトリック教会は、この全体性を、教皇を中心とした世界教会の形成に見るようになるが、プロテスタント教会は、教会が場所を越え時代を超える普遍的性格を持つこと、そしてそこで同じ教理が教えられ告白されていることに公同性を見るようになる³⁾。

使徒性についても、特にローマ・カトリックとプロテスタントとでは理解が大きく相違する。ローマ・カトリックは使徒性を教皇職の使徒継承で理解し、それを鍵の権能と結びつけるが、プロテスタント教会においては、使徒の信仰の継承に使徒性を見る。但し、使徒は何よりも主の福音を伝道した者たちであり、そこから、伝道する教会であることに教会の使徒性を見るとの主張がなされることもある。

2. 見える教会と見えない教会

このコロナ禍での混乱の中で重要なことの一つは、見えない教会、あるいは教会の見えない部分に目を向けることであろう。カルヴァンは、宗教改革期の教会の混乱の中で、「神の選び給うたすべての者」からなる見えない教会の存在を主張し、そこにこそ本物の教会があるとした⁴⁾。

確かに、神に選ばれた民の総体は目に見えない。それは、同じキリストに結ばれているとしても、時間空間の中では世界に分散しており、その総体を目で見ることができないし、カルヴァンが「現に地上に住んでいる聖徒たちだけがそれに含まれるのではなく、世のはじめ以来の、すべての選ばれた者たちが含まれる」と言うように、既に死んだ者も、そして恐らくはまだ生まれていない者をも含むからである。

しかし、その見えない教会を信ずることは、神に選ばれた民の総体である見えない教会の一員とされていることこそが（救いにおいて）重大であるということになる。見える教会がどんなに荒廃し混乱していても、重要なことは、「神の選び給うたすべての者」からなる見えない教会があることであり、その見えない教会は、コロナ禍によっても、どんな教会の混乱によっても崩れることはない、（戦闘的教会ではなく）勝利の教会としてある。そして見える教会は、この見えない教会を宣べ伝えるのである。

しかし、カルヴァンも、決して見える教会を軽視したわけではなかった。彼は、「われわれにとっては、目に見えない—ただ神の御目にしか見えない—「教会」を信じる必要があるのだが、それと同じように、われわれには、人間の目で「見える」教会と言われるものをも重んじ、これとの一致を保つことが命じられる」⁵⁾とも語る。「御言葉が真摯に宣べ伝えられ、それが聴聞される場所、また、聖礼典がキリストの制定によって執行されるとわれわれが見るところならば、いずこであろうと、神の教会が存在する」⁶⁾のであって、「このふたつの目印がその内に確立しているならば、たとえ多くの悪徳が他の面で湧き出しているとしても、決してこの共同体を捨ててはならない」⁷⁾と彼は言うのである。

カルヴァンにとって、見える教会は、人を信仰者として養育する「母」であり⁸⁾、「神が我々をキリストとの交わりに招き、そこに留め置かれる外的手段」⁹⁾であった。従って彼は、見える教会の働きが重要であることを同時に強調している。教会は福音を純粹に説教し、聖礼典を正しく執り行うべきであること、そしてそれが確実になされるための教会制度の必要性もカルヴァンは主張した。

このように、見えない教会を重視したカルヴァンにおいても、見える教会が軽視されることは警戒され、かえって見える教会のあり方が示されたことに注意する必要があるだろう。

そもそも、見えない教会を一面的に強調することには問題がある。それは、

見える教会を軽視する危険であり、さらに、見える教会と見えない教会を分離してしまう危険である¹⁰⁾。

カール・バルトは、不可見的教会と可見的教会という概念の区別を導入しつつ、「教会論的仮現説」を警戒して、「教会は「見ゆる」もの、すなわち「可見的教会」である」とし、さらに次のように語った¹¹⁾。

個々のキリスト者が、ただ時間と空間の中に「御言葉を行う人」として一従って、具体的な人間的形姿において原則的にすべての者に可見的に存在するより他ないのと同様に、キリスト教団そのものも、観念的な自治体あるいは世界として存在するのではなくて、その人間的成員の共存において、彼らが聞いた御言葉を共に行うことによって、一定の人間的交わりへと統合されて存在する。すなわち、キリスト教団も、具体的な姿で、すべての者に可見的に存在する。¹²⁾

そこで可見的であるのは、「一定の人間のあの「集合」と「交わり」の出来事であり、その特徴的な活動と達成であり、教団を他の歴史的形成物から区別するその諸特色であり、教団がそれらの歴史的形成物と共有している欠陥であり、恐らくはまたその相対的な長所」¹³⁾である。

しかし重要なのは、「教会を信ず」との告白が、「可見的なものの秘義である不可見的なものに対する信仰を告白」していることであり、従って、「教団の地上的・歴史的な形態の中に隠され従って不可見的な教団の存在、あるいは信仰の特別の目にだけ可見的な教団の存在、その霊的性格、その秘義」に目を向けることだとバルトは語る¹⁴⁾。そしてその不可見的な秘義とは、教会が「イエス・キリスト御自身の地上的・歴史的な現実存在の形である」ことだというのである¹⁵⁾。

ここで注意すべきは、バルトが可見的教会と不可見的教会を、互いに相異なるものとするのではなく、その同一性を主張していることである。彼は、教会の「一性」を根拠に、「可見的教会と不可見的教会は、二つの教会ではなく、

「一つの教会、同一の教会の、前者は形姿であり、後者はその秘義である」とする¹⁶⁾。つまり、見える教会は、その教会がキリストの体、即ち「イエス・キリストご自身の地上的・歴史的な現実存在の形である」という見えない事実、秘義を持ち、それは信仰によってのみ受け取られるというのである。

コリン・ガントンやロバート・ジェンソンは、さらに進んで、見えない教会はないと語った。ガントンは、従来の西方神学が、現実の時間的教会に先立って見えない無時間的教会を優先する傾向を持っていると指摘した上で、仮現論的な教会論を警戒し、「無時間的な教会は存在しない」とした¹⁷⁾。つまり、教会は、見える共同体のことであり、その背後に、見えない無時間的な教会の存在を前提すべきではないというのである。ガントンの場合は、共同体としての教会論を展開したいという意図があり、従って、教会論的仮現論をやや過剰に警戒している可能性がある。

ただ、彼のこの主張は、彼の西方教会の神学全般への批判から出ている面もある。いわゆる見えない教会を歴史上の具体的な見える共同体よりもある意味で優先する西方神学の傾向は、「三位一体の三つの位格が、そこに横たわる神的存在よりも後に退いて理解される」アウグスティヌスの様態論的な三位一体論と軌を一にするというのである¹⁸⁾。

また、ジェンソンは、「教会は、目に見えない存在ではない。教会は、罪人たちがパンと杯の周りに集まった、余りにも目に見える集まりである」¹⁹⁾と主張した。同時に、「目に見えないのは、この目に見える存在が、事実、彼らが主張するように、神の民であるということである」²⁰⁾とも語り、バルト同様、その具体的に目に見える群れに存在する見えない秘義にも目を向ける。彼は、見えない教会を重視する従来の教会論は、その背後に予定論の問題があると指摘する。「本当の教会の構成員は選ばれた者たちであり、それは今は数えられないというアウグスティヌスの教えが、本当の教会は「目に見えない」という考えの根源にある」²¹⁾というのである。彼は、しかし、神の選びの実現は可視的であると指摘する²²⁾。

見える教会が、ただの集団ではなく、キリストの体であり神の民であるという、見えない本質を持つことは重大であり、その点を見逃すことはできない。そして、その見えない本質は、見える教会がどんなに混乱していても、教会のしるしを保っている限り、決して揺らぐことはない。

しかし、本当の教会は見えないとするのか、あるいはその見えない教会と見える教会を同一であると理解するのかは、ジェンソンの指摘によれば、予定論の理解にかかってくる。つまり、見えない教会を、神に選ばれた者の総体とするのであれば、そもそも選びはどのように実現するのかを考える必要がある。

もっとも、選ばれた者の総体は、既に死んだ者もあり、まだ生まれていない者もあることを考えれば、完全に可視的であるとは言えないだろう。それでも、選ばれた者は必ず歴史のどこかの時点で見える教会の一員となるという意味で、見えない教会と見える教会を同一と考える可能性はあるのではないかと²³⁾。そしてその意味で「見えない教会はない」と言うことはできるのではないか。

そこで、次に、選びの理解と教会との関係について考えてみたい。

3. 選びの歴史的実現としての教会

選びの信仰は、特に改革派教会において、自らの自由意志ではなくただ神の恵みによって信じ救われたのであれば、何故私に神の恵みが働いたのかを説明する教理として重視されてきた。

もっとも、古代教父の選びの理解は、オリゲネスにあっては、神は人間の功績を予知され、その予知に従って人間を選び召し出したと考えるが、アウグスティヌスにあっては、それを、人間の功績に依らない、神の決定として理解する。ルター派は、和協信条において、神の予知による選びに接近するが、改革派は概して、一方的な神の恵みの決定としてこれを理解した。ここでは、アウグスティヌス、そしてカルヴァンの、神の決定としての選びの理解を採ることとし、選びとは何かについての詳細には立ち入らない。

ロバート・ジェンソンは、神の像を、ペリコレーシスの交わりによって一体である神のお姿に見出し、創造の完成を、人間がこの神の交わりに参与することに見る²⁴⁾。従って、神の選びは、この神の交わりに参与することへの選びであることになる。

ジェンソンによれば、キリストはそのために受肉された御子であって、「天地創造の前に、神は私たちがキリストにおいて選ばれた」とされることは、選びの対象が「キリストとその人々、つまりキリストの全体 (totus Christus)」であることを意味するとする²⁵⁾。従って、御父は、選んだ者をキリストの全体へと導かれるというのである。

具体的には、洗礼によってキリストに結ばれることで、信仰者はキリストの体となる。そして、教会がキリストの体であることは、聖餐においてそのキリストの体を分かちという具体的な、目に見える形において表れているというのである。そして、その教会が「キリストの全体」に属することは、教会は一性を持ち、その意味で単数であることに表れているという²⁶⁾。但し、まず一つの(公同)教会があって、それが地域教会を生み出して行くのではなく、一つの教会自体が地域教会(複数)の交わりであると考えべきだという²⁷⁾。

つまり、ジェンソンにおいては、洗礼によって見える地域教会に加えられること自体が選びの実現であり、見える教会の聖餐の交わりに、その群れがキリストの全体を構成するものであることが表れていることになる。言い換えれば、神の選びは、人をキリストのもとへと集め、それによってやがて神の三位一体の交わりへと招くことを目指しているが、それはこの歴史において、その選ばれた人が見える地域教会に加えられるという出来事を必ず引き起こすと主張されていることになる。

ところで、選びと歴史の關係に注目した神学者に、ヴォルフハルト・パネンベルクがいる。パネンベルクは、従来の選びの議論が、個人の選びに偏ると共に、個々人が終わりの日の救いに与るかどうかの問題に限定されてきたと指摘する²⁸⁾。例えば選びの教理の根拠とされるローマ8章29-30節は、「神はあらかじめ

め定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになった」と、そもそも、神の選びが歴史の中で実現して行く過程について語っているのに、従来の議論は実にしばしばこの救済史的関連から選びの教理を分離させてしまったというのである。

パネンベルクは、永遠の前もっての選びは、歴史の中で実現すると主張する。彼は、創造の完成を、「イエス・キリストのうちに万物がまとめられること」とし、選びはその完成を目指してのものであるとする²⁹⁾。彼によれば、神は神と異なる自立的存在として人間を創造し³⁰⁾、それがキリストのもとに「統一的にまとめられる」ことを目指される³¹⁾。キリストは、パネンベルクによれば、終末論的な新しい人間であり、神との父と子の交わりの中に生きるという、本来人間のあるべき姿（規定 *Bestimmung*）が回復したお方である。従って、「選びの行為は、父に対するイエス・キリストの子としての関係のうちに組み込まれることを目指している」³²⁾と語られることになる。

この選びは、歴史の中で、「イエス・キリストに対する信仰への召命を受けとり、そして受け入れる」ことによって、キリストに結ばれ、その御子性を共有し、キリストの、御父との子としての関係に参与することで実現する³³⁾。そもそもキリストは、「自ら歴史の中に入ってこられた」のであって、従って、キリストのもとにまとめられることは、歴史の中で起きることになる³⁴⁾。そして、「各個人は、イエス・キリストへの信仰へと招く歴史的出来事を通して、神の永遠の選びに与る」³⁵⁾と彼は言い、この選びの実現のために、歴史における教会の伝道と説教が重要な役割を果たすことを指摘する。

このキリストに結ばれた者の群れが教会であり、従って、神の選びは、地上における教会の形成を引き起こす。彼は、「原始キリスト教は、イエス・キリストにおける神の啓示行為による教会の成立と共に、神の新しい歴史的選びの行為の中に取り込まれていることを知っている」³⁶⁾と語り、教会が教会への参与を選びとの関連で理解してきたと指摘する。

このように、パネンベルクにおいても、選びは、教会の形成を引き起こす³⁷⁾。また、彼は、個人の選びは、そもそも単なる個人を救う選びではなく、

共同体に属することへと選ぶ選びであるとする。「父との関係において…子であることは確かに個々の信仰者において形をとらなければならない」が、その個々人は「切り離された個々人ではなく人類の代表としての神の民」、即ち教会と、選びにおいて関連付けられているというのである³⁸⁾。

ジェンソンにおいてもパネンベルクにおいても、重要なのは、選びの目的を、単に抽象的に、終わりの日の救いに与ることとするのではなく、キリストのもとに一つにまとめる（エフェソ1.10）ことに見出していることである。選び、あるいは救いと、キリストに結ばれることとの関係が明確になれば、キリストに結ばれることは歴史の中で、具体的には洗礼において起こることであり、従って、歴史の中で、特に見える教会において選びが実現することが明確になる。そして、キリストに結ばれた者の群れが教会であるならば、選びは必ず歴史の中で見える教会を形成することになる。つまり、教会は、神の選びの実現としてキリストのもとに集められた者たちの群れであり、その神の救済の舞台であるのである。

4. 見える教会の形成——教会の聖霊論的側面

もし教会が神に選ばれた者の群れであり、その神の選びが歴史の中で実現するのであれば、それを実現させるのは聖霊の働きによることになる。従って、聖霊論を軽視するならば、教会が神の選びの歴史的实现として、歴史の中で形成されることを十分に語るができない。

パネンベルクは、「教会は同時に霊と子の被造物である」と指摘する³⁹⁾。教会はキリストの体であり、キリストに結ばれた者の群れである。しかし、そのキリストに人が結ばれるためには、聖霊の働きを必要とする。従って、教会論は、キリスト論的であると同時に、聖霊論的でもなければならない。

パネンベルクは、従来の教会論が、教会のキリスト論的側面を一面的に強調し、聖霊論的側面を見失ってきたと指摘する⁴⁰⁾。この点については、コリン・

ガントンも同様のことを指摘している。ガントンは、「教会論の聖霊論的側面よりもキリスト論的側面を極度に強調することで、それはキリストの人性よりも神性を強調することを伴うが、仮現論的な教会論を生み出してきた」⁴¹⁾と語り、教会の聖霊論的な側面の軽視が、見える教会を軽視することにつながってきたという⁴²⁾。

パネンベルクによれば、聖霊は信仰者を一人の主³に結ぶことで、全ての信仰者が彼の御子性を受け取り共有すると同時に、彼らが「信仰者たちの交わりに組み込まれる」ようにするという。つまり、「彼らの一人ひとり⁴は、信仰を通してひとりの主と、したがってまた他のすべての信仰者たちと結びつけられ」、「霊を通して各個人は、自分自身の特殊性を越えて、「キリストにおいて」他のすべての信仰者たちと共に教会の交わりを形成するように高められる」というのである⁴³⁾。

重要なのは、聖霊が、「自分から語るのではなく」「イエスの認識へと導くこと」、つまり「御子に栄光を帰すること」にその働きの本質があると理解されていることである⁴⁴⁾。つまり、聖霊は御子と関係なく働かれるのではない。聖霊は、人をキリストへと向け、キリストへと引き上げる働きをする。

しかし問題は、そもそも墮落した人間が、どうしてキリストを信じ、キリストに結ばれるに至るのかであろう。

ところで、コリン・ガントンは、先の選びの議論とも関連して、共同体としての教会を形成する教会論の必要性を指摘する。そこで彼が参照するのは、17世紀イングランドの会衆派ピューリタンであるジョン・オーウェンの神学である。ガントンはオーウェンの神学を次のように評価する。

オーウェンは、明らかに、共同体としての教会の存在論を探究している点で興味深く、そして、恐らくそのような存在論を探究した最初の一人である。彼は、彼が新しい地平を切り拓いていることに気づいている。というのは、彼は、宗教改革者が、教理の改革こそが必要な全てであると信じ

て、共同体としての神学を展開することに失敗したと記しているからである。⁴⁵⁾

もっとも、ガントンのオーウェン理解には誤りがある⁴⁶⁾。しかし、オーウェンは会衆派の神学者であり、自由教会を形成した人物である。そのため、彼は、単に教会の制度的側面を語るだけではなく、その教会にどのように信仰者が集められてくるのか、その共同体的側面にも目を向けた。日本の教会も自由教会であり、従って、集められてきた具体的な信仰者によって建てられて行くことを語り得る教会論を必要としている。従って、ただ教会の本質を語り、教会の制度的側面を語るだけでは不十分であり、信仰者がどのように集められ、どのように教会を建てて行くのかを語らなければならない。そこで、オーウェンの理解に注目してみたい。

オーウェンは、人間の全的墮落を前提し、生まれながらの人間の魂の諸機能では、自ら信ずることは不可能であると考ええる。しかし神に選ばれた者に礼拝と神の言葉を通して聖霊が働き、聖霊は、腐敗した魂の諸機能を新たにし、信仰を与えて義とし、さらに再生させ、生涯にわたって聖化する。その聖化によって、神に自発的に従おうとする者にされて行き（オーウェンはこれを自由であると言う）、それは聖霊の助けの下で、いずれかの教会に自発的に集い、礼拝し、教会を形成する者とするというのである。そして、さらなる聖化によって、教会は愛の交わりとされて行くようになるともいう⁴⁷⁾。

オーウェンにとって、この聖化の場は教会である⁴⁸⁾。そして教会は、信仰者をさらに教化する働きを担う。

このようにオーウェンは、全的墮落した人間を聖化する聖霊の御業によって教会が形成されて行くことを語った。聖霊は、人間の中にまで働いて造りかえ、信ずるはずのない者を信ずるようにする。そして、自発的に礼拝する者に変えるというのである。もちろん、聖化は常に途上であって、従って、この人間の自発性は常に聖霊に支えられる必要があるし、過大評価することはできない。しかし、聖化された人間が教会を形成する。このように言うことで、教会

は神によって建てられるのであると同時に、人間の具体的な業によって建てられるのもあることを語るができる⁴⁹⁾。つまり、神は、聖霊によって人間を聖化し、神に自発的に従い、従って教会に集い、礼拝し、教会を形成する者とすることによって、教会を建てようとされる。

但し、教会の伝道によって人は導かれるのもあって、従って、聖化の結果、信仰者がさらに伝道する者とされることまで語るべきであるだろう。その伝道を通して、選ばれている者がさらにキリストへと招かれ、神の選びの歴史的实现として、共同体が形成されてゆくのである。

5. 終末論的共同体としての教会

教会が選びの実現の観点から理解されるならば、教会は、ただの共同体ではなく、創造の完成の姿を表す終末論的な共同体であることになる。

パネンベルクは、教会は、終末の神の国を表すしるしであるとした⁵⁰⁾。もっとも、教会が神の国そのものではないとも言う。けれども、「教会は、神の救いの将来が教会それ自身のうちにすでに現臨し、教会を通して、教会の宣教とその礼拝生活を通して、人びとに近づくことができるという仕方で、しるしとなっている」⁵¹⁾と語り、教会には、神の国の生の先取りがあるというのである。教会には、既に、キリストへの参与によって「神の国における人類の将来」、即ち神との、父と子としての交わりの中に生きる人間の生がある⁵²⁾。

但し、パネンベルクによれば、神の選びの意志は、さらに全人類の再生を目指すものである。従って、教会は終末に向けて、終末論的共同体として、「それを越えて人類全体に向けられたイエス・キリストにおける神の救済の意志を証言する」役割を担うのだという⁵³⁾。

問題は、パネンベルクが、教会は神の国そのものではないとする点である。もちろん、中間時において、神の国が完成することはなく、その意味で、教会が神の国そのものであることはない。しかし、コリン・ガントンは、従来の終末論がしばしば、「異なる世界の事柄であり続け、その結果、創造の目的あ

るいは終末論的な神のご計画は、有限な救われる者によって天（の人々）が補充されるためとされてきた」と指摘する⁵⁴⁾。そして、それでは、歴史における、終末の完成を目指した聖霊の働きそのものが、神の国を形成するのではないことになる。そこで、ガントンは、選びが終末の完成に向けてのものであるとするならば、それはただ天に人を補充するものではなく、むしろ選びの歴史における実現そのものが神の国を形成すると語るべきではないかと主張する。

キリストのもとに人が集められ、神のものとされるが、それは既に神の支配の中に入れられたことにならないか。そうであれば、それは神の国に既に入れられたと言うことはできないか。しかし、ヨハネの黙示録21章によれば、古い天と地が過ぎ去った後に、新しい天と地が到来するとされる。それを文字通り解釈するのであれば、歴史の中でキリストのもとに集められることと、神の国に入れられることの間には、何らかのギャップが存在することになるのであろうか⁵⁵⁾。

しかしいずれにしても、教会はキリストの体であり、そこでは、キリストのもとに一つにまとめられるという、終末に向けての神の救済の御業が、終末に先立って確かに実現しているものであり、それ故に讃美の歌声が響き渡るのである。

結語

ここまで、キリストの贖罪の御業を前提としつつ、その十字架で成し遂げられた御業を根拠として、どのように救いが私たち一人一人にもたらされ、歴史が終末の完成に向かうのか、特にそこにおける見える教会の位置づけが明らかになるような記述を試みてきた。

以上から、教会をどのように理解できるだろうか。

神は永遠において、人を救いへと選ばれた。選ばれた人々は、歴史の中で、教会の伝道を通して信仰への召命を受け、それを聖霊の働きによって受け入れ、洗礼を受けて見える教会に加えられる。洗礼によって信仰者は十字架にか

かり復活されたキリストに結ばれ、十字架の恵みによって義とされ、神の子、神のものとされる。見える教会は、洗礼によってキリストに結ばれた者の群れである故に、キリストの体であり神の民であるという、見えない本質を持つ。そしてキリストはお一人である故に、全てに見える教会は、見えない一つのキリストの体（ジェンソンの言うところの「キリストの全体」）を構成しており、従って、洗礼によって、人がキリストのもとに集められるという、創造の完成に向けた出来事が起きている。教会はそれ故に終末論的共同体であり、神の国を先取りして表し、味わわれる場であると同時に、福音の説教と聖餐を通して、信仰者が聖化される場であり、聖化によって、信仰者は教会を愛の交わりとして形成し、終末の完成に向けて、伝道へと派遣される。

教会は、選びを歴史の中で実現する聖霊の働きによって形成される。聖霊は人をキリストへと向け、キリストに結び、キリストの十字架による贖罪をもたらし、人を義認へと導くと同時に、罪深い人間を神の子として再生させ、さらに聖化する。教会はその舞台ともなり、さらにその御業によって形成される。その際、聖霊は、人間を聖化しつつ、その人間の業を用いて教会を形成する。

教会が、神の選びに基づく救済の御業によって建てられ、またその舞台となるのであれば、教会は必ず神によって形成され続けるだろう。既にキリストによってなされた贖罪に基づいて、ここで終末に向けた救いが（時代を超え場所を越えて）起きていることを世界の兄弟姉妹と共に告白しつつ、「この町にはわたしの民が大勢いる」との御言葉に励まされて、主によって与えられた伝道の務めを、聖霊の助けの内に誠実に果たして行きたい。

(すだ・たく)

注

- 1) 本稿は、2024年1月9日に行われた教職セミナーにおける主題講演の原稿に手を入れたものである。
- 2) アリスター・E・マクグラス『キリスト教神学入門』（神代真砂実訳）、教文館、

2002年, 682頁から引用

- 3) 17世紀イングランドの会衆派ピューリタンであるジョン・オーウェンは、「見えない公同の教会」と「見える公同の教会」を区別した。前者は、時代を超え場所を越えて広がる、全ての選ばれた者からなるいわゆる「一つ」なる教会、つまり「見えない教会」を指す。それに対し、後者は、その時代を超え場所を越えた全教会が持つ見える普遍性のことであるとし、それを世界教会の形成に見るローマ・カトリック教会や、同じ式文による礼拝に見る英国国教会とは異なり、同じ信仰（の中核）が告白されていることに見た。拙論「ジョン・オーウェンの三位一体論的神学における自由の理解—キリスト者の自由とその教会論並びに寛容論への影響—」, 博士論文, 東京神学大学, 2013年, 第4章を参照。
- 4) カルヴァン『キリスト教綱要』IV.1.7. カルヴァンによれば、見える教会には「一時的に忍んで受け入れられているだけ」に過ぎない、「称号と外見のほか、キリストに属する何もも持たない、偽善者」や「多くの野心家や、貪欲なやから、妬み深いもの、罵るもの、汚れた生活を営むもの」が含まれているが、その見えない教会には、「神の御顔の前に真実に存在し、そのうちには、子とされる恵みによって神の子となり、御霊の聖化によってキリストの真の肢体とされたもののほか、何人をも含まない」という。
- 5) 同上
- 6) 前掲書, IV.1.9
- 7) 前掲書, IV.1.12
- 8) 前掲書, IV.1.1
- 9) 前掲書, IV表題
- 10) 見える教会と見えない教会が分離されれば、当然に見えない教会が重視され、見える教会は軽視されることになる。
- 11) カール・バルト『教会教義学』「和解論」I/4（井上良雄訳）, 新教出版社, 1961年, 20頁, 22頁
- 12) 前掲書, 22頁
- 13) 前掲書, 24頁
- 14) 前掲書, 23頁, 35頁
- 15) 前掲書, 35頁
- 16) 前掲書, 49-50頁. 但し、教会の「一性」が、可視的教会と不可視的教会の同一性の根拠となり得るかについては疑問がある。
- 17) Colin E. Gunton, 'The Church on Earth: the Roots of Community', in: C.E.Gunton

and D.W.Hardy eds., *On being the Church: Essays on the Christian Community*,
Edinburgh: T&T Clark, 1989, p.79

18) *ibid.*, p.69

19) Robert Jenson, *Systematic Theology*, vol.2, New York and Oxford: Oxford University
Press, 1999, p.174

20) *ibid.*

21) *ibid.*

22) 彼は、「私が選ばれた者の一人であるということは、三位一体の名によって洗わ
れることによってのみ見えるようになる」と語り、具体的には、洗礼において
選びが可視的になるとする。*ibid.*, p.252.

23) 現実の教会に「毒麦」が混在しているとの議論がなされることがあるが、その
問題にはここでは立ち入らない。

24) *ibid.*, p.222

25) *ibid.*, p.175

26) 従って、信仰者は洗礼によってキリストの全体に参加することになるが、この
キリストの全体は、終末まで完成しない。それは、「教会が神の国から異なるも
のであることとしての罪と死に加えて、教会の頭がこの世から取り去られている」
からだという。つまり、終末におけるキリストの再臨は、「頭」の回復である
と理解されている。また、教会は、やがて終末に三位一体の交わりに加えら
れることの待望として存在するともされる。cf. *ibid.*, pp.222, 334.

27) *ibid.*, pp.224-226. これは、ピーター・フォーサイスが普遍教会と各個教会との
関係を、ケンブリッジ大学の例（ケンブリッジ大学は、30余のカレッジの総
体であって、「ケンブリッジ大学」という組織は存在しない）で説明したこと
に類似している。cf. Peter T. Forsyth, *The Church and the Sacraments*, London:
Independent Press, 1917. なお、17世紀イングランドの、国教会から独立した自由
教会を認めるかどうかの議論の際には、この普遍教会が見える形を取るのか
どうか、また、キリストは普遍教会を措定されたのか、あるいは各個教会を措
定されたのかということも論点となった。それも本来は論ずるべきであるが、
今回はこの点には踏み込まないことにする。拙論「ジョン・オーウエンの三位
一体論的神学における自由の理解」, 第4章を参照。

28) ヴォルフハルト・パネンベルク『組織神学』第3巻（佐々木勝彦訳），新教出版
社，2021年，453頁

29) 前掲書，461頁

- 30) 本来はその自立性は、神から自己区別をし、神を讃えるための自立性であるが、墮罪によって、人間は神から自己区別をせず、自立性がそのための自立性ではなく自己自立性になってしまっているとパネンベルクは言う。拙論「パネンベルクにおける創造論」,『神学』62号,2000年を参照。
- 31) パネンベルク『組織神学』第3巻,465頁
- 32) 同上
- 33) 前掲書,466頁
- 34) 前掲書,468頁
- 35) 前掲書,462頁
- 36) 前掲書,455頁
- 37) パネンベルクはこの点で、カール・バルトの選びの理解を批判している。バルトにおいては、キリストが選ぶ神であると同時に選ばれた人間でもあり、このキリストに全ての人間が包括されているとパネンベルクは見る。その結果、神の選びの対象は第一にイエス・キリストであって、「共同体は、第二義的に初めて、イエス・キリストの選びの周辺（外接円）として、神の選びの対象」になっているに過ぎなくなってしまうという。しかし、選びは、単なるキリストの選びの模倣や外円であるのではなく、「御子と御父との関係へと引き込まれ、キリストと同じ形に形成されていく」ものであると理解すべきであるとパネンベルクは考える。そしてそれが、「キリストにおいて選ばれている」ことであるとする。前掲書,470-471頁を参照。
- 38) 前掲書,471-472頁
- 39) 前掲書,37頁
- 40) 同上
- 41) C.E.Gunton, 'The Church on Earth', p.65
- 42) ヘンドリクス・ベルコフとイヴ・コンガールによれば、ローマ・カトリックの神学は、聖霊の働きを司教制度を建てることに限定する傾向にあり、逆にプロテスタントの神学は、聖霊の働きを、個人を変革する働きに限定する傾向にあるという。ベルコフもコンガールも、この両者の聖霊論の統合を図っている。特にベルコフは、聖霊が教会の制度・働きを通して個人に働くことと理解することを主張している。もし彼らの指摘が正しいとすれば、プロテスタントの神学は、聖霊の働きを専ら個人の聖化と関連させ、教会を建てることとの結びつきを十分に語ってこなかったことになる。ヘンドリクス・ベルコフ『聖霊の教理』（松村克己,藤本治祥訳）,日本基督教団出版局,1967年;イヴ・コンガール『わたし

は聖霊を信じる』第2巻（小高毅訳），サンパウロ，1995年を参照。また、拙論「聖霊の働きについて」、『神学』80号，2018年をも参照。

- 43) パネンベルク『組織神学』第3巻，30頁
- 44) 前掲書，34-35頁
- 45) C.E.Gunton, 'The Church on Earth', pp.70-71
- 46) 拙論「ジョン・オーウェンの三位一体論的神学における自由の理解」，第4章，特に127頁及び136-138頁を参照。
- 47) 前掲書，第2章-第4章参照
- 48) ロバート・ジェンソンも、聖化について、福音の語られる場に身を置くことの必要性を語る。R.Jenson, *Systematic Theology*, vol.2., p.291.
- 49) カール・バルトも、「教会は、＜そこでは神が働き給う＞という意味と＜神がそこで引き起こし形成し給うのは人間の働きである＞という意味と、二重の意味において、実在的に成立し、存続し、生きる」と、同様のことを指摘している。カール・バルト『教会教義学』「和解論」II/4（井上良雄訳），新教出版社，1972年，7頁。
- 50) パネンベルク『組織神学』第3巻，53頁
- 51) 同上
- 52) 前掲書，60頁
- 53) 前掲書，468頁
- 54) Colin E. Gunton, 'Election and Ecclesiology in the post-Constantinian Church', in: C.E.Gunton, *Intellect and Action: Elucidations on Christian Theology and the Life of Faith*, Edinburgh: T&T Clark, 2000, p.142.
- 55) 神の国の先取りとしての教会と終末の神の国との同一性の問題は、神の信実、あるいは教会を建てる聖霊が完成因と理解されるべきことに注目することによって答えられるべきであろうが、今回はこの問題に立ち入らない。